



Title	發刊の辭
Author(s)	
Citation	懷徳. 1924, 1, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88681
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

發刊の辭

吾が懷德堂の學、専ら聖經賢傳を講じ、徳性を涵養し、兼て學術を研究するを以て宗旨となす。師資人あり、各講壇を主持す。實に浪華第一の修養境たり。吾人講を聴く者、書を挾んで堂に登り、皆欣然として斯の道を聞くを樂む。文運隆々學徒日に増す。洵に盛なりと謂つべし。然るに講を聴く者、年齒差あり、職業各異り、一時に相集り、講畢つて退散す。未だ會を立て友を聯ぬるの設あらず。吾人竊に以て憾となす。大正十二年、斯の堂開講後、正に七年を歷たり。茲に二三同志、會約の議を胥謀り、以て諸を衆に諮る。乃ち異口同音咸其の舉を賛す。是に於て會約を創定し、名けて堂友會と曰ふ。遂に記念祭恒典の日を以て、爲に開會式を行ふ。之を總るに務めて該堂の宗旨に遵ひ、堂友相親み、麗澤の益を資せしむるに在り而して會誌を印行する所以のものは、たゞ是れ情に發して文を成すの美のみ。嗚呼斯の堂開かれて七年、乃ち斯の會成る。豈禮學記に所謂小成とい

ふものにあらずや。然り而して其の所謂大成なるものは未だし。今よりして後競々業々彼此切磋し、業を敬み羣を樂み、成功永く頼り、各人をして光あらしめん。是れ吾人の固より當に勉むべき所なり。乃ち斯の會の由來を述べ、以て發刊の辭となす。

大正十三年三月

懷德堂堂友會幹事識